

# 生涯教育研修活動報告書

細胞検査研究班

- 1 実施日時：2023年2月13日 18時00分～19時00分
- 2 会場：Web開催 教科・点数：専門教科－20点
- 3 主題：Let's 供覧!! ーどう報告する？伝えようか？この標本ー
- 4 講師：加藤 智美（埼玉医科大学国際医療センター 病理診断科）  
：猪山 和美（自治医科大学附属さいたま医療センター）  
：急式 政志（地方独立行政法人埼玉県立病院機構 埼玉県立小児医療センター）
- 5 協賛：なし
- 6 参加人数：会員 84名 賛助会員 0名 非会員 0名
- 7 出席した研究班班員：鶴岡慎悟 船津靖亮 急式政志 加藤智美 猪山和美 野本伊織  
稲山拓司 並木幸子 小川弘美

## 8 研修内容の概要・感想など

本研修会は「Let's 供覧!! ーどう報告する？伝えようか？この標本ー」と題し、加藤氏、猪山氏、急式氏より、各分野の細胞診報告様式の概要や、提示症例の解説、各報告様式の相違点について講演が行われた。例年、Let's 供覧!!では典型的な症例を提示することで精度管理の側面を持った内容を提供してきたが、本年度は趣向を変え、多様化する細胞診報告様式の現状と、個人のさまざまな細胞所見に触れられる研修会を目指した。事前に症例写真を配布し、回答集計にはクエスタントを活用した。回答には各細胞診報告様式と所見記載用のフリーコメント欄を設けた。研修会では、症例解説に集計結果と合わせて、コメントを視覚的に統計化したデータを加えた症例検討会のような形式で行った。

講演1では、加藤氏より、各領域の報告様式とその背景、現状についての説明が行われた。報告様式は標本の適否の明文化だけでなく、正確に病態の報告を臨床医へ返すためや、均霑化や国際化といった様々な目的がある。子宮頸部領域のベセスダシステムが広く浸透した理由として、発癌におけるHPV関与のエビデンスが組み込まれていることや、標本適否の評価、患者管理のための指針が明記されていることが挙げられる。甲状腺領域のベセスダシステムにおいても同様に標本適否の評価があり、加えて悪性危険度、臨床対応が明記されているこ

となどが理由となる。しかし、施設によって臨床医のコンセンサスが得られない状況など運用には問題が数多くあることが浮き彫りとなった。各報告様式メリットを理解した上で使用することと、臨床医とのコミュニケーションを取りながら使用することが大切であるとのことであった。

講演2では猪山氏より、婦人科領域から全3症例の回答結果と細胞像の解説が行われた。子宮頸部領域で使用する報告様式を問うアンケートでは、回答した全施設がベセスダシステムを使用しているとの回答で、前述の通り、広く浸透していることが表れた結果であった。一方、子宮内膜領域ではクラス分類を使用している施設が半数以上を占め、記述式内膜細胞診報告様式等の新たな報告様式は少ない傾向であった。症例①CIN3の症例では、表層から深層までの様々な異型扁平上皮細胞がみられた中で、どの細胞を最高病変とするのか、また、各細胞像をどう捉えるのかが論点となった。日頃から丁寧に鏡検する必要があると感じた。また、症例②扁平上皮癌（外陰部癌）の症例では、個人回答の約4割が悪性とし、細胞形態や細胞質の輝度に着目した結果、多くの方が扁平上皮癌と回答した。一方で、核異型が弱いためにASC-USやLSILの回答もあった。zoom上のチャットでも、ディスカッションが大いに盛り上がった症例であった。

講演3では急式氏より、甲状腺領域から全3症例の回答結果と細胞像の解説、第8版甲状腺取り扱い規約と第2版ベセスダシステムの相違点を中心とした考察についての講演が行われた。症例は、乳頭癌様の核所見を有する3症例を提示した。回答結果からも多くの細胞検査士が核所見を重視していることがうかがえたが、その一方で、症例⑤の腺腫様結節であった症例では、核所見に注目するあまり悪性と判定した回答も多数見られた。甲状腺領域では乳頭癌の特徴的な核所見を捉えることが重要とされているが、出現様式や細胞質所見、背景などを含めた総合的な判定が必要である。また、鑑別困難とする場合には、報告様式のメリットを活かし、コメントにて推定組織型を記載することが重要とのことであった。最後に、乳頭癌様の核所見を有する濾胞性病変の判定区分について考察がおこなわれた。第8版甲状腺取り扱い規約では「濾胞性腫瘍」に、第2版ベセスダシステムでは「意義不明」あるいは「悪性疑い」に分類されるという点が大きく異なる。その理由として、米国での過剰治療を避けるために「境界病変」の概念を加えた第4版WHO分類に第2版ベセスダシステムが準拠しているという背景がある。このように、各報告様式には相違点があることを理解した上で細胞判定をおこなう必要がある。さらには、境界病変をも含む多様な組織型の可能性があることを視野に入れ、コメントを記載することが大切であるとのことであった。

全体を通して、細胞診報告様式に対して参加者の関心が高いことを認識した。また、近年、web研修会という開催形態が定着し、症例検討会のような個々の細胞検査士の所見や考えに直接触れる機会は減少してきている。このような状況下で、今回のように新たな開催形態を模索し、企画・開催することは、細胞検査研究班の一つの役割でもあると感じた。

提出日：2023年3月2日

文責：小川弘美